

聖書的に言えば、人間の命は4種類

聖書的に言えば、人間の命には4種類あります。

[A] アダムが創造された直後の命（未確定の命）

[B] アダムが罪を犯した後の命（寿命のある命）

[ク-] 命の木の実を食べた後の命（不老不死）

[D] クリスマンが天に上げられた後の命（不滅不朽）

1 「未確定の命」

善悪の知識の木の実を食べたら「死ぬ」と言われていました。

ということは、それを食べない限り「死なない」ということです。

最初の人間アダムは1つの条件を満たしてる限り、ずっと死ぬことはない命を与えられて創造されました。

では、それは、「永遠の命」が与えられたということでしょうか。

そうだとすると、「命の木」は何のために備えられたのでしょうか。

神は、アダムが禁じられていた実を食べた後、「命の木」からその実を食べることができないようにされました。

「主なる神は言われた。…「今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」…こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。(創世記 3:23,24)

罪を犯した後でも、命の木から食べれば、永遠に生きることになる故に、それに近づくことができないようにされたという記述です。

「食べたら死ぬ」と言われていましたが、しかし食べてもすぐには死にませんでした。(即死ではなかった)「食べたら、いずれ死ぬ」者になりました。

つまり、「死」とは無縁だった命から、寿命のある命へ変化しました。

つまり、[A] から [B] の状態へ移りました。この [B] が、全人類の持つ命です。

この [B] の命を持つものが、「命の木の実」を食べるなら、「永遠に生きる」つまり、「不死」となり、そして恐らく不老の存在になったのでしよう。

「食べたら死ぬ」ということは「食べない限り死なない」わけで、しかし、にもかかわらず、「永遠に生きる」ことになる「命の木」を備えられたということは、「善悪の木」の実を食べない状態と、「命の木」の実を食べた状態では、命の実質、価値、権利が微妙に違うということです。

2：9の記録によれば、この2本とも「園の中央に生えさせた」とあります。

この2本の木が、すぐ隣に並んで立っていたのか、その位置関係はわかりません。

2:17で、アダムに対して「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」と警告されています。

3:3によるエバの言葉によれば「園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから」と言われています。

エバの表現は、「善悪の知識の木」ではなく「園の中に生えている木」に変わっています。

(ここで、神は「食べたら殺す」と言われた分けではありません。「食べると死んでしまうから、あなたは死んではいけないから、だから食べてはいけない」と禁じられたということも覚えておきたいと思います。)

神はこの2本の木を備えましたが、注目させ、禁じたのは、「善悪」の方だけでした。

アダムとエバは「命の木」の存在、またそれを食べると、どうなるのかについては何も知らされてはいなかったのではないかと考えられます。

おそらく、その禁令の理解は、「園の中央にある木」は、ともかく「善悪の木」であり食べてはいけないもの、と考へてられていたと推察できます。少なくとも、これが、「善悪の木」「これが「命の木」とはつきり区別していたということは恐らくなかったであろうと思われまゝ。人間の側からの「命の木」に関する言及は一切ありません。

それで、死ぬ予定のない人間にあらかじめ「命を木」を備えておられた理由として、例えば、新入早々の社員に数ヶ月間の「みならい」の期間があり、それをクリアした人だけが、「正式に社員とみなされると同じように、恐らく、最初の間は、命の権利に關しての試験期間があり、それに合格したと見なされたとき、まだ知らされていなかった「命の木」の存在を明らかにする目的があつたのだらうと思ひます。

「…征服する者に、わたしは、神のパラダイスにある命の木から食べることを許そう…」(啓示 2:7)

「…自分の長い衣を洗つて、命の木に[行く]権限を自分のものとし、…」(啓示 22:14)

それで、最初の創造された直後の人の命は、死なないがしかし、「永遠の命」を得たとは言えない、暫定的命であつたのだらうということ [A] を「未確定の命」と呼ぶことにしました。

2 寿命のある命

[B] は罪のある、或いは罪を受け継いでいる故に、健康であつても老化し、長さに限界のある権利しか持たない命であり、人間として「不完全」な状態にある命のことです。

3 不老不死の命

[ク -] は「命の書」に記された人の命と同等であり、テストに合格したゆゑに「永遠の命」が保証される、つまり、もはや何の条件もない、無条件不老不死の権利を授かつた人の命と言えます。

「しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行ふ者はだれ一人、決して都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れらる。」(黙示録 21:27)

しかし、「不死」であるということは自然死がないということであり、(或いは不慮の事故死

から保護された命であり)、滅ぼされることはあり得る命と言えます。

4 不滅の命

[D] はクリスチャンが天に召された後の、天使たちにさえ付与されていない「不滅不朽」の命の権利が与えられます。

「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」(コリント第一 15:52 - 55)

ここで「朽ちるべき者が朽ちないものを着る」とは [B] の、寿命のある物質の命が、霊的な体を持つ生命体に変化するということを述べているのでしよう。

また、「死なない」と訳されているギリシャ語、アサナシーアですが、「死の勝利はどこにもない」と宣言され、この同じ語がテモテ第 16：16 では神に関して用いられているので、単に死なない、自然死がない、不死というだけでなく、絶対に死ぬことがないという意味であろうと理解し、[ク-]とも異なる、不滅の命の権利を有すると結論しました。

「救い」について

ここで念のためにお断りしておきますが、ある方は、クリスチャンには2種類あり、天的な希望を持つ「クリスチャン」と、地的な希望を持つ「クリスチャン」がいるという認識を持たれている方もおられるかもしれませんが、聖書には、クリスチャンに2種類あるなどと言うことは、どこにも述べられていませんし、暗示されてもいません。クリスチャンとは「油を塗られて」天に招待されている人々のことであり、聖書的な「人」の区分けは、[クリスチャン]、[諸国民]、[ユダヤ人]の三つであり、これらは聖書中で区別して記されています。

(この点についての詳細は、「10 啓示の「大群衆」が天にいる聖書的根拠」や

「15 「クリスチャン」とはどんな人々のことですか」

「19 ほかの羊」とはどんな人々ですか」を。

また、ユダヤ人はキリスト後も依然として別扱いされているという根拠については

「64 黙示録 11章の「二人の証人」とは誰ですか」をご覧ください。)

聖書の多くのところで、「救い」についての言及がありますが、スピリチュアルな意味での「救い」ももちろんありますが、究極的には「救い」とは、命の権利の復活でしょう。

全人類は [B] の、限りある命しか持たないものです。それが、救われるということは、罪の影響が完全になくなり、元に戻されるということでしょう。

ですから、誕生時アダムと同じ [A] の「未確定の命」の権利が得られるということになります。

具体的には、これらの人は、「千年王国」に入る人々で、ハルマゲドンを通過した諸国民と、そこで生まれる人々ということになるでしょう。(それまでに亡くなったクリスチャンではない人は、千年が終わった後、復活してきて、その機会を与えられると聖書は述べています。)

そして千年が終わった時、それらの人々は「命の書」に書かれ、つまり「命の木から食べる

ことを許される」ことになり、永遠が保証された命の権利が与えられることになります。

この救いは、クリスチャンに約束されている、[D]の命とは異なります。

前者の[B]から[A]への変化は、クリスチャンにではなく、それ以外の一般人類（諸国民と表現されている）に差しのべられている「救い」の希望です。

後者の、[B]から[D]への変化は、クリスチャンだけを対象とした「救い」です。

（この違いについての詳細は、「41 永遠の命—誰が享受しますか-1 永遠の命を得ることはクリスチャンになることに依存しない」という四部からなる最初のレポートを参照してください。

また、ハルマゲドン後も諸国民は生き残るという聖書の根拠を扱った「08 来るべき千年王国の下に地上にいる人々」や「16 「羊とヤギ」の「羊」とは誰ですか」も併せてご覧下さい。）

ここでまとめますと、命には4種類あり、救いには2種類あることが分かります。

しかしこれも段階的な神の目的の過程にあるからで、将来的には、すべて本来もくろまれた通りの「1つ」のものに帰するのだらうと思っています。

緒国民（あるいは一般人類）の救いとクリスチャンの救いの、それぞれを[緒 - 救]、[ク - 救]と表わすことにすると、[緒 - 救]の条件は、「羊とヤギ」の羊とみなされる条件と同じでクリスチャンに対する善行だけです。

終末期のその時点でクリスチャンは迫害によつてあぶり出され、否応なく浮き彫りにされますので誰がそうなのか見分けがつかないことはないでしょう。その時のクリスチャンの窮状に対して人間味のある親切を示すかどうかを試されます。

一方[ク - 救]の条件はかなりシビアなものです。

基本的には「全てを後にして絶えずキリストの足跡に従い続けること」が求められます。

それには、信仰、忠節、クリスチャン人格、福音を分かち合うことなど多くのことが関係して来るでしょう。

聖書中に「報い」或いは「希望」として示される「永遠の命」は、すでに書いたように「命の木」において初めから備えられていたものです。

つまり、罪が入る前から用意されていました。

しかし、あがないによる救いは、罪のゆえに対応策として計画されたものです。

言い換えれば、[ク - 救]はアダムが罪を犯さなければ、陽の目を見ることはなかったものです。さらに、最初に選ばれたイスラエルが不忠実にならなければ、全世界から集められる「クリスチャン」なるグループが存在する必要もなかったのです。当初、ユダヤ国民がその役割である祭司を務めるはずだったのです。

それで、[ク - 救]は、度重なる人間の側の失敗のゆえに更なる救済策として神が再計画されたものに関するものです。

最初からの人間に予定されている[緒 - 救]の目指すところ、つまり「永遠の命」を神は忘れてしまわれた分けではありません。

にも関わらず、その神の最初の目的を度外視し、[ク - 救]だけが聖書の唯一の救いであるかのような間違った教理のために「キリスト教」は甚だしい誤解を受けていると言えます。

この2種類の救いに関しては、外国のサイトも含め、数多く調べましたが、私の知る限り、誰も、どの団体もこのような解説をしているところはないようです。どのキリスト教の教義も、「救い」はクリスチャンになることであり、その他は「諸国民」であり、その結末はハルマゲドンでの「滅び」ということになっています。

しかし、これが、義と公正、愛という神の特質と矛盾するのではないかという思いが、多くの人に疑念や失望などを与えてしまっている、重大な教理上の欠陥のひとつであると思います。

さて、この救いを得るには、どちらにしても無条件ではありません。

無条件に命の権利が与えられたものが「寿命のある命」であり、これまでの人類の長い歴史において許されてきました。しかしそれにも期限があり、「救い」の次のステップを踏むためにはやはり条件をクリアしなければなりません。

ある方は、「救い」に条件があるならそれは「無償のたまもの」とは言えないと感じる方もおられるかもしれません。

しかし、命はそもそも、人間が頼んだからではなく、神の意志によって誕生しました。

確かに「こんな人生なら生まれてこなかった方が良かった。生んでくれと頼んだ覚えはない。恩義など感じたくない」という台詞がありますが、心情的には、よく分かりますが、無理矢理に永遠に生かされるわけでもなく、我が子を産み育てる神の親心はやはり、無償のたまものと言えるのではないのでしょうか。